

昭和二十二年三月二日 印刷
昭和二十二年三月三十日 印刷
(昭和二十二年三月二日印刷)

初等科國語七 第六年三月二日

◎ 定價 金五拾錢

著作權所有 發行所 文 部 省

東京都小石川區久堅町一〇八番地

印刷發行 日本書籍株式會社

代表者 大 橋 光 吉

東京都小石川區久堅町一〇八番地

印刷所 日本書籍株式會社

Approved by Ministry
of Education
(Date Mar. 2, 1946.)

東京都小石川區久堅町一〇八番地
日本書籍株式會社

この深山の朝の靈氣にふれるため、私はここまでのば
つて來たのだ。

九 燕岳に登る

「出發。」
山田先生の聲が、中房溫泉旅館の庭に勇ましく響き渡つた。午前七時である。きのふの雨はからりと晴れて、太陽は、はがらかにこの溫泉の谷間を照らしてゐる。

ルックサック・水筒・金剛杖の身支度もかひがひしく、ぼくらは、小鳥のやうにをどる胸を押さへながら、つり橋を渡つた。ごうごうと鳴る激流の上に、高い橋がぐらぐら動くのが、愉快でたまらなかつた。

道はすぐ登りになる。かちりかちりと、枝が岩に鳴つた。前の人の足あとをふみしめるやうに、一歩一歩登つ

来る。その間を際立つてくつきりと、うぐひすの聲がころがるやうに續いて走る。この美しい木々の緑と、さわやかな鳥の聲のごちそうを前にして、しんせつな山のお招きの席に、しばらくは、すべてを忘れて立つてゐた。

林の中を、奥へ奥へと進んで行くにしたがつて、小川のせせらぎはだんだん高く聞えて来る。林を出はづれて、頭の上の緑のおほひが盡きてしまつた時、いつのまにのぼつたのか、朝の日の光が、石を囓んで流れる水の上にをどつてゐる。

危ふげにかけ渡された一本の丸木橋の上を、静かに渡る。この丸木橋に立つて、朝の太陽の前に身しまひを正し始めた高い山々の針葉樹林を見あげる。きりのやうにとがった梢の先を天に向けて真直に立つものは、かうやまきである。ふさふさした枝の冠をいただいて立つてゐるのは、檜である。

て行く。せまい道の両側には、大きなさが、ぼくらの頭をおほふくら高く茂つてゐた。

岩角が出、木の根が横たはつてゐる。

「氣をつけろよ。」

と、前の方で聲がする。額も、せなかも、汗ばんで来た。はすむ呼吸が、前にも後にもはつきり聞かれる。

かうして、つづら折りの明かるい山道を、あへぎあへぎ登つた。時々見おろす谷底に、さつき出發した温泉宿が、だんだん小さくなつて行く。谷川が、下で遠く鳴つてゐる。つい向かふに、ぐつと見あげるほどそびえ立つてゐるのが、有明山である。

「今日は、あの山よりもつと高く登るのだぞ。」

と、石川先生がいはれた。

まばらな潤葉樹林を通して、太陽がじりじりと照りつける。帽子の下からわき出る汗が、顔を傳つて流れ落ち

と、後の方でいつしか悲鳴をあげる。

「もう少しがんばれ。」

と、前の方でましかへす。

まもなく、びりびりとうれしい笛が鳴つた。みんなは待つてゐたやうに、そこらへ腰をおろして汗をふく。水筒の水を飲むと、のどがぐくりと鳴つた。木の間では、うぐひすが鳴いてゐる。谷底から吹きあがる風が、はだに快く感じる。

そろそろ、針葉樹が現れて来た。

やがて針葉樹の密林へはいると、急に快い涼しさを覚える。時に「さうしかんば」のはだが、稍からもれる太陽の光に映じて、薄暗い中に銀色に光る。道はいくぶんなだらかになつたり、またぐつと急になつたりする。さのふの雨でじめじめして、うつかりすると足がすべる。木の根、岩角を数へるやうに、ふみしめ、ふみしめ登つ

植物に、變つたものがあるやうになつた。葉がふちに

似た「ななかまど」や、大木から長くひげのやうにぶらさがる「さるをがせ」などを、石川先生に教へてもらつた。かはい桃色の「いはかがみ」の花を、道端に見つけるのが楽しみであつた。

あたりにだんだん霧がわいて来て、大木の幹を、かなたへ、かなたへと薄く見せた。耳を澄ますと、遠く近くさまざまの小鳥のさへづりが聞かれる。

かうして、とうとう合戦小屋にたどり着いたのが午前十一時、みんなはすむぶんつかれてゐた。ここで辨當をたべる、そのおいしいこと。

空がしだいに曇つて来た。霧もだんだん深くなる。し

がし、小屋の人は、

「天気は大丈夫です。」

と、先生たちにいわせてゐた。

ささがめづらしく花をつけてゐた。

いつのまにか大木が少なくなつて、せいの低い細い木が目につくやうになつた。つひにはそれもなくなつたと思ふと、眼界が急に開けて、山腹の斜面に、低い緑の「はひまつ」が波のやうに續いて見えた。みんなが、わいわい歓聲をあげた。

道は、ややなだらかになつた。

「三角點。」

といふ聲がする。ぼくらは、胸がをどつた。

やや廣く平なところに、三角點を示す石があつた。そばに腰掛が何臺がある。中房温泉から四・六キロと記した道標が立つてゐる。頂上まであと二キロだ。

晴れてゐれば、ここから、今登らうとする燕の絶頂も槍岳その他の山々も見えるさうだが、今日は何も見えな

い。行手の道も「はひまつ」も、すべて夢のやうに霧の

中に薄れてゐる。ただ、天地がいかに明かかつた。

それからは尾根傳ひに、なだらかな道が續いた。薄日がぼかぼかとせなかを温める。道端は、「いはかがみ」の花盛りであつた。小さなすみれや、蘭もところどころに咲いてゐる。どれもこれも、すき通るほどあざやかな色であつた。

ふと「はひまつ」の間に、高さ一メートルにも足りない「たかねざくら」が、今を盛りと咲いてゐるのを見た。眞夏に櫻の満開である。

「山は、今春なのだ。」

と、石川先生がいはれた。みつばちが、盛んに花から花へ飛んでゐた。

行くにしたがつて、花は美しかつた。右手に見おろす斜面に咲き續く黄色な花は、大きなのが「しなのさんばい」小さなのが「みやまさんばうげ」であつた。その間に、白い「はくさんいりげ」や、深紅の「べにばな

かふの山脈との間は、千丈の谷となつて、その底に高瀬川の鳴つてゐるのが、かすかに聞えて来る。この大自然がくりひろげる景觀に打たれて、ぼくらは、ほとんど一種の興奮を感じるほどであつた。

そこから右へ縦走して、燕の絶頂をめざした。

馬の背のやうに、峯傳ひの道が續いてゐた。ややもするとくづれようとする砂と岩との間を、「はひまつ」にすがりながら進んだ。右下から吹きあげる風は、もうもうと雲を巻きあげて、それがこの屋根を界に消散する。それは、ふしぎに思へるほどはつきりとしてゐた。左は急な斜面が神祕な谷底へ深く落ち込んでゐる。

とうとう、燕の絶頂が来た。それは、大空の一角にそり立つ御影石の岩塊である。そこは、十人とは乗れないほどせまかつた。今こそ、二千七百六十三メートルの最高點に立つたのである。さつきの槍岳が、「ここまでお出で。」といふやうに、しかしいかにも嚴然とそびえて

で満天の星のやうに美しかつた。

その邊から、ところどころに残雪があつた。みんながうれしがつて雪をすくつた。

つひに、霧の中に近く山小屋を見あげるところへ来た。下から風が強く吹きあげる。足もとには、かなり大きな雪溪が見おろされた。

先頭は、もう山小屋の右下の鞍部にたどり着いた。

「早く来い。向かふは晴れて、山がすてきだぞ。」

と、だれかが帽子を振りながら、ぼくらに叫んでゐる。やがてそこへ登り着いたぼくらは、何といふすばらしい景色を、西の方に見渡したことであらう。

左端の穂高に續いて、槍岳が、それこそ天を突く槍の穂先のやうに突き立つてゐる。更に右へ右へとのびる飛騨山脈が、蓮華・鷲羽・水晶・五郎と、大波のやうに、屏風のやうに、繁雜のはだあざやかにそそり立ち、うねり續く雄大な莊嚴な姿。ところどころに、白雲がただよつ

あらう。

「あんな山へ登れる人があるのかなあ。」

といふと、元氣な山田先生は、

「もう二年たつたら、きみたちも槍へ登れるよ。」

といはれた。

東も北も一帯に雲がとざして、ぼくらの村はもとより、富士・淺間・白馬・立山等の姿を見ないのが、まったく残念であつた。

午後二時、下山の途についた。

「山は廣い。」と、ぼくはつくづく思つた。さうして何年かのうちに、きつとあの槍に登らうといふ希望をいだきながら、山をくだつた。

十 月光の曲

ドイツの有名な音楽家ベートーベンが、まだ若い時の

ことであつた。月のさえた夜、友人と二人町へ散歩に出て、薄暗い小路を通り、ある小さな美しい家の前まで来ると、中からピアノの音が聞える。

「ああ、あれははくの作つた曲だ。聞きたまへ。なかなかうまいではないか。」

かれは、突然かういつて足を止めた。

二人は戸外にたつたずんで、しばらく耳を澄ましてゐたが、やがてピアノの音がはたとやんで、

「にーさん、まあ何といふいい曲なんぞう。私には、もうとてもひけません。ほんたうに一度でもいいから、演奏會へ行つて聞いてみたい。」

と、さも情なさうにいつてゐるのは、若い女の聲である。

「そんなことをいつたつて仕方がない。家賃さへも拂へない今の身の上ではないか。」

「まあ、一曲ひかせていただきます。」
そのいひ方がいかにもをかしかつたので、いつた者も聞

ノで、それに樂譜がございませんが。」

「え、樂譜がない。」

といひさして、ふと見ると、かはいさうに妹は盲人である。

「いや、これでたくさんです。」

といひながら、ペートーベンがピアノの前に腰を掛けて、すぐにひき始めた。その最初の一音が、すでにきやうだいの耳にはふしぎに響いた。ペートーベンの兩眼は異様にかがやいて、その身には、にはかに何者かが乗り移つたやう。一音は一音より妙を加へ神に入つて、何をひいてゐるか、かれ自身にもわからないやうである。きやうだいは、ただうつとりとして感に打たれてゐる。ペートーベンの友人も、まったくわれを忘れて、一同夢に夢見ること。

折からともし火がばつと明かるくなつたと思ふと、ゆ

ペートーベンは、急に戸をあけてはいつて行つた。友人も續いてはいつた。

薄暗いらふそくの火のもとで、色の青い元氣のなさうな若い男が、靴を縫つてゐる。そのそばにある舊式のピアノによりかかつてゐるのは妹であらう。二人は、不意の來客に、さも驚いたらしいやうである。

「ごめんください。私は音楽家ですが、おもしろさについつり込まれてまゐりました。」

と、ペートーベンがいつた。妹の顔は、さつと赤くなつた。兄は、むつとりとして、やや常惑のやうである。

ペートーベンも、われながら餘りだしぬけたと思つたらしく、口ごもりながら、

「實はその、今ちよつと門口で聞いたのですが——あなたは、演奏會へ行つてみたいとかいふことでしたわ。」

ペートーベンは、ひく手をやめた。友人がそつと立つて窓の戸をあけると、清い月の光が流れるやうに入り込んで、ピアノのひき手の顔を照らした。しかし、ペートーベンは、ただだまつてうなだれてゐる。しばらくして、兄は恐る恐る近寄つて、

「いつたい、あなたはどよういふお方でございますか。」

「まあ、待つてください。」

ペートーベンはかういつて、さつき娘がひいてゐた曲をまたひき始めた。

「ああ、あなたはペートーベン先生ですか。」

きやうだいは思はず叫んだ。

ひき終ると、ペートーベンは、つと立ちあがつた。三人は、「どうかもう一曲。」としきりに頼んだ。かれは、再びピアノの前に腰をおろした。月は、ますますさへ渡つて来る。

「それでは、この月の光を題に一曲。」

といつて、かれはしばらく澄みきつた空を眺めてゐたがやがて指がビヤノにふれたと思ふと、やさしい沈んだ調べは、ちやうど東の空にのぼる月が、しだいにやみの世界を照らすやう、一轉すると、今度はいかにもものすごい、いはば奇怪な物の精が寄り集つて、夜の芝生にをどるやう、最後はまた急流の岩に激し、荒波の岩に碎けるやうな調べに、三人の心は、驚きと感激でいつぱいになつて、ただばうつとして、ひき終つたのも氣づかないくらゐ。

「さやうなら。」

ベートーベンが立つて出かけた。

「先生、またおいでくださいませうか。」

さやうだいは、口をそろへていつた。

「まゐりませう。」

ベートーベンは、ちよつとふり返つてその娘を見た。かれは、急いで家へ歸つた。さうして、その夜はさん

元朝天皇の勅命によつて、太安萬侶は、神代國の古語を、わが國の古傳を、文字に書き表すことになつた。

阿禮は記憶力の非凡な人であつた。かれが天武天皇の仰せによつて、わが國の古記録を読み、古いひ傳へをそらんと始めたのは、三十餘年前のことである。當時二十八歳の若き若きであつた阿禮が、今ではもう六十近い老人になつた。この人がなくなつたら、わが國の古傳、つまり神代以來の尊い歴史も文學も、その死とともに傳はらないでしまふかも知れないのであつた。

勅命のくだつたことを承つた阿禮は、それこそ天にものぼるこちであつたらう。さうして、長い長い物語を讀みあげるのに、ほとんど心魂をささげ盡くしたことであらう。ところで、これを文字に書き表す安萬侶の苦心は、それにも増して大きいものであつた。

そのころは、まだかたかなもひらがなもなかつた。文字といへば漢字ばかりで、文章といへば、漢文が普通で

トートーベンの「月光の曲」といつて不朽の名聲を博したのはこの曲である。

十一 朝顔に

朝顔につるべ取られてもらひ水
木から物のこぼるる音や秋の風
何着ても美しうなる月見かな

ころぶ人を笑うてころぶ雪見かな

千代

雀の子そこのけそこのけお馬が通る

やせ蛙まけるな一茶これにあり

やれ打つなはへが手をする足をする

十二 古事記

古事記は、わが國の古語を、漢字ばかりでそのまゝに書き表すことが、安萬侶に取つての大きな苦心であつた。

試みに、今日もし、かたかなもひらがなもないとして、漢字ばかりで、われわれの日常使ふことばを書き表さうとしたら、どうなるであらう。「クサキハアライ」といふのを漢字だけで書けば、さしき「草木青」と書いて満足しなければなるまい。しかし、これでは、漢文流に「サウモクアヲシ」と讀むこともできる。そこで、ほんたうに間違ひなく讀ませるためには、「久佐幾波阿遠以」とでも書かなければならなくなる。だが、これではまたあまりに長過ぎて、讀むのかへつて不便である。

安萬侶は、いろいろの方法を用ひた。例へば、「アメツチ」といふのを「天地」と書き、「クラゲ」といふのを「久羅下」と書いた。前者は「クサキ」を「草木」と書くのと同じであり、後者は「久佐幾」と書くのと同じ

である。「ハヤスサノヲノミコト」といふのを「遠須佐之男命」としたのは、「草木」と「久佐幾」と二つの方法をいつしよにしたのである。これらは名前だから、割合ひ簡單でもあらうが、長い文章になると、その苦心は一通りのことではなかつた。

しかし、かうした苦心はやがて報いられて、阿禮の語るところは、ことはそのまま文字に書き表された。安萬侶はこれを三卷の書物にまとめて、天皇に奉つた。古事記といつて、わが國でも最も古い書物の一つになつてゐる。和銅五年正月二十八日、今から一千二百餘年の昔のことである。

天の岩屋、八岐のをうち、大國主神、ににぎのみこと、つりばりの行くへ等の神代の物語を始め、神武天皇や日本武尊の御事蹟、その他古代のいひ傳へが、古事記に載せられて今日に傳はつてゐる。

それは、要するにわが國初以來の尊い歴史であり、文藝である。多に大體なことは、かゝつてわが國の古事記

いみじき樂とわれは聞く。

丈餘のろかいあやつりて、

ゆくて定めぬ波まくら、

ももひろちひろ海の底、

遊びなれたる庭廣し。

いくとせここにきたへたる

鐵より堅きかひなあり。

吹く潮風に黒みたる

はだは赤銅さながらに。

波にただよふ氷山も、

來たらば來たれ、恐れんや。

古語のままに残つたことである。

十三 われは海の子

われは海の子、白波の
さわぐいそへの松原に、
煙たなびくとまやこそ、
わがなつかしき住みななれ。

生まれて潮にゆあみして、
波を子守の歌と聞き、
千里寄せくる海の氣を
吸ひて童となりにつけり。

高く鼻つくいその香に、
花の香のやあり。

起らば起れ、おどろかじ。

いで大船を乗り出して、

われは拾はん海の富。

いで大船に乗り組み、

われはさぐらん海の幸。

十四 いけ花

まさえさん、この間は、お手紙をありがたうございました。おとうさんも、おかあさんも、お元氣ださうで安心しました。こんなに遠く離れてゐると、うちのこと何よりも知りたいですよ。

私も、こちらへ來てからもう一年近くなりますが、これまで病氣一つしませんでした。毎日毎日品へ出て働い

てゐることが、私をこんなに丈夫にしてくれたのでせう。それとも、こちらの氣候が私に合ふのかも知れません。

この一年間は、何を見ても、何をして、始めてのものばかりで、めづらしいやら楽しいやら、まるで夢のやうに過ぎて來ました。

この春植ゑつけた野菜類は、たいそうよくできて、この間一部分だけ收穫しました。その時にうつした寫眞を同封しておきましたから、見てください。いろいろな野菜がありますから、何だかあててごらん下さい。

お手紙によると、このごろまさえさんは、熱心にいけ花のおけいこをしてゐるさうですね。せんだつて、おかあさんからのお手紙にも、そのことが書きそへてありました。私のおいて來た花ばさみや花器などが、そつくりまさえさんの手で、かはいがられてゐると思ふと、たいそううれしい氣がします。

私もいけ花が好きなので、いそがしい中にも、ずつとん。暗れ暗れとして心の楽しい時には、花の方から、喜んで動いてくれます。さうして、できあがつたものにも、その時、その人の氣持が、そつくりそのまま現れるやうに思はれます。

どうかまさえさんも、いけ花をみつしりけいこして、日本の少女らしい、つつましかやかな心を育ててください。

今、こちらはいちばんよい時候で、空がどこまでも高く澄んでゐます。では、おとうさんとおかあさんに、よろしくお傳へください。さやうなら。

十五 玉のひびき

御製

いそ崎にたゆまずするあら波を渡ぐいはほの力をぞおもふ

西ひがしむつみかはして榮ゆかむ世をこそいのれとし

續けてやつてゐます。

つい四五日前も、野原でさきやうの花を見つけたので、それを摘んで來ていけてみました。こんなにして野の草花をいけたりすると、その昔、まさえさんと二人で、野原へ花摘みに行つた時のことが、なつかしく思ひ出されました。

「はらんを、何度も何度もいけるのは、あきてしまひました。」と書いてありましたが、あれは、いけ花のいちばんもことになるものですから、しつかりとおけいこをしておかなければなりませんよ。何を覺えるにしても、そのもとをのみこむことが大切だと思ひます。もとといつても、形ばかりでなく、いつも自分の心がこもつてゐなければなりません。

いけ花ほど、いける人の氣持のよく現れるものはないと、自分ながらびつくりすることがあります。例へば、何か氣にさはることがあつて心の落ち音かない時には、いけ花のうしろを思つても、花はいふことをきかぬ

のはじめに

大正天皇御製

沙風のからきにたへて枝ぶりのみなたくましき磯の松

原

明治天皇御製

あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが心とみがな

目にみえぬかみの心に通ふこそひとの心のまことなりけれ

さしのぼる朝日のごとくさわやかにたまほしきは心なりけり

高殿の窓てふまどをあけさせてよもの櫻のさかりをぞみる

昭憲皇太后御歌

朝ごとにむかふ鏡のくもりなくあらまほしきは心なりけり

十六 山の生活

銅山

入坑の時刻がせまつた。

坑口の前の線路には、幾十臺の軌道車が、鑛員たちの乗るのを待つてゐる。

集合した鑛員は、鐵かぶとに似た帽子をかぶり、作業服・おか足袋に、尻あてといつたいでたちである。

坑道へはいる前に、みんないっせいに體操をする。朝の光を受けて、元氣よく腕をのばし、足を舉げ、胸を張る。

體操がすむと、みんな軌道車に乗り込む。出發に際し、事務所の係員が、

「今日も、十分氣をつけて働いてください。では、元氣で行つていらつしやい。」

と挨拶する。軌道車が動きだすと、撞撃器から快活な行

進曲が響いて来る。さうして、まつしぐらに坑道へ進んで行く。

一步坑内へはいれば眞暗で、あたりの岩石に、軌道車の響きがごうごうと反響する。鑛水のにはひがして来る。「採鑛へ總進軍。」と書いた電燈看板に迎へられて、三キロ、四キロと坑内深くはいつて行く。

やがて軌道車からおり、昇降機に分乗して、數百メートルのたて坑を一氣におりて行く。

そこから、各自所持の探鑛現場へと急ぐ。アセチレン燈をたよりに、ほら穴を奥へ奥へもぐつて行く。地熱のために暑くなり、温度が高いのでむしむしする。上着などは脱いでしまふ。

「さ、仕事にかからう。」

鑛石の肌が美しい。色が美しいのではない、形が美しいのでもない。日本をゆたかにする寶が、この中に生きているのだ。さう思ふと、鑛石の光澤も、ひだも、硬度も、重量感も、みな美しく見えて来るのだ。

鑛岩機をかかへて、「ダ・ダ・ダ・ダ」と鑛石に穴をあける。いくつもあける。あけてはそこへ爆薬をつめる。爆破させる。もうもうと、煙やガスが立ちこめる。これが晴れるのを待つて、鑛石運搬の鑛員がやつて来る。シャベルですくつては、トロロッコに積み込む。たち

まち鑛石満載のトロロッコが二臺、三臺とできあがる。やがて、十臺、二十臺と長くつながつて、坑外へ運搬されて行く。まさに山の幸を得ての凱旋だ。鑛石を運んでしまつたあとの坑内に、支柱を組み立てる鑛員が仕事にかかる。太い、がんじょうな材木を、層居のやうな形にがつしりと組み合はせる。岩石がくづれないやうに、働く人の足場が落ちないやうにと念じながら。

かうして、鑛石を掘る人、鑛石を運ぶ人、支柱を立てる人——これらがいつしよになつて、坑内で働いてゐる。めいめい勝手なことはできない。心を一つにすることが、かんじんだ。一分のすきも許されない。もしあれば、危険といふ魔が、すぐねらつて来るからである。

鑛員同志に「申し送り」があり、「申し受け」があつて、たがひに堅く連絡を取るのもそのためである。これはちやうど、かまをたく人、運轉する人、方向を見定める人などが、いつしよになつて艦船を走らせるのと變りはない。

鑛員たちは、だれも見えてゐない眞暗なところで仕事をするので、なまけようと思へば、なまけられないことはない。しかし、決してそんな氣持にはなれない。

七時間の労働時間も、やがて過ぎてしまふ。

「交代の時間だ。」

鑛員たちは、現場を引きあげて昇降機に乗る。再び軌道車に揺られて、歸途につく。疲れた五體ではあるが、働きの満足で心は輕やかである。ごうごうと響く車の音は、見送つてくれる山の歡聲である。

清風一陣、坑内から坑外へ出る。

太陽の輝く青い空、何といつてあの明かるさをいひ表したらよいだらう。

石の山

見あげるばかり高く切り立つた山だ。御影石の山々だ。山の肩のあたりから、刃物でそいだやうに突つ立つてゐて、真晝の日光が、まぶしいほど反射して来る。

あちらの山でも、こちらの山でも、三四人づつ一かたまりになつて、石の上で働いてゐる。鑿を持つ人、それを槌で打つ人、その穴に水をさす人。

堅い石に、長い鑿を打ち込んで行くこの仕事は、生やさしいものではない。真直に打ち込むのだ。第一、並み並みならぬ根氣がいる。

槌の音は、いかにものんびりと響いてゐるが、一槌ごとに心をこめて打つてゐる音である。一センチ、二センチ、石に穴があく。それが積み積つて、五メートル、八メートルにもなるのである。

日の出から日の入りまで、同じやうな仕事を、くり返しくり返し續けてやる。たとへ日が照らうが、風が吹かうが、じりじりと震けられて行く。

初等科國語七 第六學年前期用 (第三分冊) 【第二分冊第十六回一山の生活】ニツバタ

十分深い穴を掘つてしまふと、火藥を固くつめる。爆音とともに、家ほどもある御影石が、ごろんごろんと、倒れ落ちる。その大きな石を二つに割り、四つに割り、用途によつては更にいくつにも小さく割つて行く。

堅い、大きな石が、小さな鑿と槌で、思ひ通りにばくんばくんと割れる。

割られた石材は、石積み車に載せられて、山の道をすべるやうに運ばれて行く。

日がな一日、露天で働く石工たちは、みんな日にやけて、顔も、腕も、黒々としてゐる。いかにも丈夫さうだ。けれども、仕事の相手は大きな岩であり、山のからだである。それで、石工の姿は、山の中で見かけると至つて小さく、たよりなく見える。よく、あの兩腕で石が割れるものだ。よく山と取り組んで働けるものだと思ふ。

一人前の石工になるためには、早くから弟子入りをし

初等科國語七 第六學年前期用(第二分冊)

昭和二十一年四月二十四日 翻刻印刷
昭和二十一年五月二十五日 翻刻發行
昭和二十一年四月二十四日 文部省發行

初等科國語七 第六學年前期用(第二分冊)
定價 金參拾五錢

著作權所有 著作人 文 部 省

發行所 東京都王子區堀船町一丁目八五七番地

翻刻發行 東京書籍株式會社

代表者 井上源之丞

印刷所 東京都王子區堀船町一丁目八五七番地

Approved by Ministry of Education
(Date Apr. 24, 1946)

發行所 東京書籍株式會社

なければならぬ。

弟子たちは、石くづをかたづけたり、仕事場の掃除をしたり、鑿などをやく火のふいごをふいたりする。かうして、三年も五年も石の山にかよつては、石工の仕事を覚えて行くのである。大きな石が、おもしろいほど思ひ通りに割れる腕前になるには、長い間の汗みどろの努力がひそんでゐる。たとへば石を割るには、石の目を見なければならぬ。石の目といふのは、ちやうど板でいへば、木目のやうなものである。小さな雲母や、石英や、長石などが、ごちやごちやに入り混つてゐる石の面を見て、その目を見わけ、それによつてこの石はかう割れるといふことが判斷される。もし石の目を見まちがへれば、石は、とんでもない方向にひびが入り、思はない倒れ方をする。石の山で働く人は、大まかで荒つばい仕事をしておるやうで、決してさうではない。